初期の英英辞書：Henry Cockeram's *The English Dictionarie* (1623) について

浦田　和幸

はじめに
1. *The English Dictionarie* の紹介
　1.1. 前付けより
　1.2. Henry Cockeram の紹介
2. *The English Dictionarie* の概要
3. *The English Dictionarie* の特徴：第 1 部
　3.1. 見出し
　3.2. 定義
4. *The English Dictionarie* の特徴：第 2 部
5. *The English Dictionarie* の特徴：第 3 部
おわりに

はじめに

英語における一言語辞書 (monolingual dictionary) の歴史は、1604 年に出版されたロバート・コードリー (Robert Cawdrey) の *A Table Alphabeticall* をもって始まるとされる。それから 12 年後の 1616 年に *An English Expositor* と題する 2 番目の英英辞書がジョン・ブロカー (John Bullokar) によって出版され、さらに 7 年後の 1623 年に *The English Dictionarie* と題する 3 番目の英英辞書がヘンリー・コケラム (Henry Cockeram) によって出版された。[1)] 本書は先行の 2 辞書と同様、難語辞書 (hard-word dictionary) の系統に属する辞書である。これら 3 冊は、17 世紀最初の四半世紀に登場した英語辞書として草分け的存在であり、後の英語辞書発達の過程を考えるうえで非常に重要な存在である。小論では、英語史および辞書史の流れのなかで、コケラム編 *The English Dictionarie* の特徴について検討する。

１．*The English Dictionarie* の紹介

１．１．前付けより

The English Dictionarie は、*A Table Alphabeticall* や *An English Expositor* と同様、八折判 (octavo) の小さな書物である。前付け (front matter) を中心に，体裁を見てみよう。まず、タ

イトル・ページを引用する。

THE ENGLISH DICTIONARIE: OR, AN INTERPRETER of hard English Words.
Enabling as well Ladies and Gentlewomen, young Schollers, Clarkes, Merchants, as also Strangers of any Nation, to the vnderstanding of the more difficult Authors already printed in our Language, and the more *speedy attaining of an elegant perfection of* the English tongue, both in reading, speaking and writing.
Being a Collection of some thousands of words, neuer published by any heretofore.
By *H.C.* Gent.
LONDON.
Printed for *Nathaniel Butter*, and are to be sold at his shop, at S^{t}. *Austins* gate, at the signe of the *Pide-Bull*.
1623.

本書 (*The English Dictionarie*) は、英語辞書では 'dictionary' という名称を冠した第1号であった。タイトル・ページには、コードリーの *A Table Alphabeticall* と同様、対象者と目的への言及があり、「貴婦人と上流婦人、若い学徒、事務員、商人、あらゆる外国人」を対象として、「より難解な書き手の英文を理解し、読み話し書く卓越した技能をより迅速に修得すること」を目的としている。また、本書は、これまでに出版されたことのない数千語を集成したと記されている。[2)]

The English Dictionarie には前付けとして、タイトル・ページに続いて、リチャード・ボイル卿への「献辞」(“To The Right Honourable, Sir Richard Boyle, Knight, Lord Boyle, Baron of Youghall, Viscount Dungaruan, Earle of Cork, and one of his Maiesties most Honourable Priuie Councell of the Kingdome of Ireland, &c.”) がある。[3)]

続いて、「著者から読者への注意書き」(“A Premonition from the Author to the Reader”) があり、そこでは本書の構成に関して説明がなされている。辞書本体は3部に分かれる。

「第1部」は、「現用の選りすぐりの語」(“the choisest [*sic*] words themselues now in vse”)、すなわち難解語を見出しとし、それに日常的な英語で意味を付している。コケラムの第1部は、コードリーやブロカーの難語辞書と同類である。なお、コケラムは「現用の」と謳っているが、後にもふれるように、実際には用いられていたかどうか疑わしい幽霊語 (ghost word) が少なからず見出される。

「第2部」は、日常的な表現を高尚な語に置き換える、言ってみれば発信型の辞書である。

それは第 1 部とは逆の構成であり、より洗練された高尚な言葉を求めるときに引くのが目的である。しかし、著者は、度を越す難語をも収録したことについて、読者に対して次のように断っている。

> Wherein by the way let me pray thee to obserue that I haue also inserted (as occasion serued) euen the *mocke-words* which are ridiculously vsed in our language, that those who desire a generality of knowledge may not bee ignorant of the sense, euen of the *fustian termes*, vsed by too many who study rather to bee heard speake, than to vnderstand themselues. (“A Premonition from the Author to the Reader” より)

英語のなかで馬鹿げた使い方をされる「もったいぶった語」(‘mock-words’) や、理解するよりむしろ人前で話すのを聞かれんがために学ぶような連中が用いる「誇大表現」(‘fustian termes’) も含まれている。この発言から察すると、コケラムはいわゆる「インク壺用語」(inkhorn terms) を意識的に収録してはいるが、それを実際に使用することについては必ずしも肯定的でなかったようである。[4)]

「第 3 部」は百科的項目を部類別に収録したものである。人物、男神と女神、巨人と悪魔、怪物と蛇、鳥と獣、川、魚、草木、石、樹木、等々、内容は多岐にわたっている。

以上、コケラムの 3 部構成を概観した。受信型の第 1 部はコードリーやブロカーの延長線上にあるが、発信型の第 2 部は英語辞書としては新機軸である。また、百科的項目に特化した第 3 部も英語辞書としては新機軸であり、コケラムは言葉典と事典を区別し、後者を巻末に纏めるという方法をとった。

前付けの最後には「賛辞」があり、7 人の友人から韻文で言葉が寄せられている。そのうちの 1 人は、*The White Devil* (『白魔』) や *The Duchess of Malfi* (『マルフィ公爵夫人』) という悲劇の作者として有名な、劇作家のジョン・ウェブスター (John Webster, c.1580 − c.1625) である。

１．２．Henry Cockeram の紹介

『オックスフォード英国人名辞典』(*Oxford Dictionary of National Biography*) における Beal (2004) の記述によると、ヘンリー・コケラムは *The English Dictionarie* の編者として知られるだけで、その生涯については生没年をはじめ不詳である。（活躍期として、“*fl.* [= L. *floruit* ‘he flourished’] 1623 − 1658” という年代が示されている。1623 年は初版の、1658 年は第 11 版の出版年。ちなみに、最終版は 1670 年刊行の第 12 版であるが、これは他者の手による改訂で、

以前の版とは体裁も構成も大きく異なり、内容的には別の辞書と言ってもよいほどである。）

コードリーとブロカーについては多少なりとも伝記的要素が明らかにされているが、その点、コケラムは対照的である。ただ、前節で「賛辞」についてふれた際に述べたように、劇作家のジョン・ウェブスターとは親交があったようである。また、「賛辞」のなかでは、1 人が "Mr. Henry Cockram [*sic*] of Exeter" と呼びかけ、また、2 人が "Master Henry Cockeram of Exeter" と呼びかけていることから、彼はエクセター市民であったのであろう。Beal (2004) は、"He may have been the Henrye Cockram [*sic*] who married Elizabethe Strashley at Holy Trinity, Exeter, on 2 February 1613." と推測している。

2．*The English Dictionarie* の概要

The English Dictionarie は八折判で、前付け 14 ページ、本体 315 ページ、収録項目は第 1 部が 5810、第 2 部が 4237、第 3 部が 781、計 10828 項目である。同じく八折版のコードリー初版の収録項目は 2511、ブロカー初版は 4155 であったので、コケラムの総収録項目数（10828）は、コードリー初版の約 4.3 倍、ブロカー初版の約 2.6 倍に相当する。前 2 辞書と類似の構成の第 1 部に限ってみても、コケラム第 1 部（5810 項目）は、コードリー初版の約 2.3 倍、ブロカー初版の約 1.4 倍に相当し、コケラムでは難語見出しがかなり増強されていることが分かる。

ページの構成は全篇を通して 2 段組みである。 1 項目あたりの長さは、第 1 部では大抵 1 行か 2 行程度の短いものであり、長くても 10 行前後のものが散見される程度である。ブロカー初版では百科的項目が多く混入していたため、最も長い項では 6 コラム (3 ページ) を超え、項目の長さの点で大きくバランスを欠いていたが、コケラムでは百科的項目を第 3 部に纏めたため、第 1 部は長さの点でバランスをほぼ保っている。第 2 部では、項目の長さは大体 1 ～ 3 行程度である。第 3 部では、百科的項目を扱うため内容に応じて説明の長さはまちまちであり、数行から 20 行以上まで、多岐にわたっている。第 1 ～ 3 部の具体例については、以下、第 3 ～ 5 節で詳しく見ることにする。

それでは、ここで、3 部構成のそれぞれについて若干例を挙げておくことにしよう。

第 1 部は、"The First Part of the English Dictionary" という表題で始まる。（なお、本辞書のタイトル・ページでは 'Dictionarie' と記されていたが、第 1 部の表題では後に標準的な綴りとして確立する 'Dictionary' と記されている。当時の綴字の揺れを示す例である。）

見本として、T 項の冒頭の 7 語を挙げる。

TAbernacle.　A Pauilion or shelter made with boughes and boards, or a Tent for warre.

Tabitude.　A consumption.

Taciturnitie.　Silence.

Taction.　A touching.

Tænerous.　An entrance into hell.

Talaries.　Shooes with wings, as Mercuries were.

Talent.　A certaine value of monies, there are many kinds of them, some containe the summe of two hundred thirtie three pound sterling, others foure hundred pound, and some two hundred pound.

tabernacle と talent 以外は、ブロカーに収録のない語である。両語ともブロカーの説明よりかなり短い。特に tabernacle は差が顕著で、説明に費やされた語数は、ブロカーが 74 語であるのに対し、コケラムは 14 語である。総じて、コケラムの定義は短い。

次に、第 2 部を見てみよう。第 2 部は、“The Second Part of the English Translator” という表題で始まる。ここでは、第 1 部の ‘Dictionary’ とは違って、‘Translator’ という呼び名が用いられていることに注目したい。平易な英語を主にラテン語由来の高尚な語に翻訳する、つまり、置き換えて用いることを含意している。例として、T 項の冒頭の 7 語を挙げる。

THe Table of a booke.　*Index*.

to Take out.　*Abstract*.

to Take away.　*Depriue*.

to Take to himselfe.　*Assume*.

to Take, or drawe from another thing.　*Deriue*.

to Take away.　*Abolish, Disanull, Abrogate, Derogate, Deduct.*

a Taking away.　*Disannulling, Abrogation, Abolishing, Derogation, Deduction.*

見出しの中ではキーワードが大文字で示され、各項目はキーワードに従ってアルファベット順に配列されている。上の引用では、キーワードは Table, Take の順に出現し、このあとは、Tale, Talke, Tame... という順で続いていく。今度は右側に与えられた対応語に目を向けると、上の引用ではすべてラテン語由来の語である。

最後に、第 3 部を見ておこう。第 3 部の表題は以下の通りで、取り上げられる内容を具体的に示している。“The Third Part Treating of Gods and Goddesses, Men and Women, Boyes and

Maides, Giants and Diuels, Birds and Beasts, Monsters and Serpents, Wells and Riuers, Hearbs, Stones, Trees, Dogges, Fishes, and the like."　ここでは、例として、"Maides" という範疇のもと、"Maides that died for loue" と題する項で取り上げられた 5 人の乙女の説明を挙げておく。

ECcho,　a Virgin reiected of her Louer, pined away in the woods for sorrow, where her voice still remaineth, answering the out-cries of all complaints.

Hero,　drowned her selfe for Leanders loue.

Sappho,　for the loue of a Boy drowned her selfe.

Scylla,　for loue she bare to Minos her Fathers enemy, stole from him his purple haire, and gaue it Minoes whereby he ouercame her, but he loathing the trecherie cleane forsooke her, whereupon she drowned her selfe in the sea.

Thisbie,　slue her selfe with a sword, for the loue she bare her Pyramus.

古代ギリシアの女流詩人のサッフォー以外は、神話か伝説の登場者である。それぞれ簡潔な説明がなされている。

３．*The English Dictionarie* の特徴：第１部

ここでは，パイロット・スタディーに基づいて，*The English Dictionarie* の第 1 部の特徴について具体的に見ることにする。

３．１．見出し

３．１．１．コードリー、ブロカーとの比較

コケラムが先行のコードリーやブロカーの延長線上にあり、両者に負うていることはしばしば指摘されてきた。たとえば、Osselton (2009:138) は、"The first part, taking up roughly half of the whole volume, is a hard-word book much in the spirit of Cawdrey and Bullokar and is greatly indebted to them." と述べている。では、見出しの点で、先行 2 辞書とコケラムとの共通項はどの程度であろうか。コケラムの *The English Dictionarie* (1623) の第 1 部の B, G, O, T 項のうち、それぞれ最初の 25 語、計 100 語を取り上げ、それに相当するコードリーとブロカーの箇所との共通項を調査した。コードリーに関しては、時代的により近い *A Table Alphabeticall* の第 4 版 (1617) を比較の対象とした。（ただし、ここでは見出し語の異同のみを調査の対象とし、定義の異同については考慮外とする。定義については、3.2. で検討する。）

Cockeram (1623)	Cawdrey (1617) の共通項	Bullokar (1616) の共通項
100	33	56

限られた範囲の調査ではあるが、見出し語の点で、コードリーとの共通項は約 3 割、ブロカーとの共通項は約 5 割である。コケラムの 100 項目のうち、コードリーとブロカーのいずれにも見られない見出しは 41 項目ある。つまり、約 4 割は先行の 2 辞書には見られない、コケラムが独自に加えた見出し語である。どのような語が新たに加わったかの参考として、41 項目すべてを下に挙げておく。OED で確認すると、引用例がコケラムからの 1 例のみか、あるいは、コケラムに初出後も辞書からの引用例のみで、「文献から実際の使用例が見つからなかった稀な語（または語義）」というレーベル (*rare*[-0]) を付されたものが 8 語ある。[5] いわゆる幽霊語 (ghost word) である。下の引用中、これらの語には左肩にアステリスクを 2 つ (**) 付けておく。また、OED においてレーベル (*rare*[-0]) は付けられていないが、引用例がコケラムからしか挙げられていないか、コケラムが初出の語（または語義のもの）が 12 例あるので、それらには左肩にアステリスクを 1 つ (*) 付けておく。

Bacchanalean frowes, *Ballatron, *Bandle, Baptize, *Basiate, Bastion, Bath (‘ten pottles in liquor’), Galactopoton, Gallemaufrey, Gallulate, *Gangean colour, Garbe (‘a custome or fashion’), Garrulous, *Gemmated, Obambulate, Obambulation, **Obarmate, *Obarmation, *Obduct, Obduction, **Obequitate, *Obequitation, Obesitie, **Obganiate, **Oblatrate, Oblatration, **Obligurate, **Tabitude, Taciturnitie, *Taction, Tænerous, Talaries, **Tanackels, Tapers, *Tardigrade, **Tardiloquie, Tardiloquus, Tarditie, *Tartarean, Teirce, *Temulencie.

以上のうち、気になる点として、Baptize が難語として挙げられているのは意外である。ブロカーの ‘Baptist’ の項の説明中では baptize という語が用いられているし、また、コードリーの ‘baptist’ の項の定義中では baptize の派生語である baptizer という語も用いられている。また、Tapers (蝋燭) は古英語以来用いられ、今日でも認識できる語であるため、果たして 17 世紀前半に英語の難語辞書に収録するに値する語であったのかどうか疑問に感ずる。また、Bastion, Garbe (=garb), Garrulous, Obesitie (=obesity), Teirce (=terse) も今日の英語で普通に理解できる語であるため、難語辞書の見出しとしては若干の違和感を覚える。しかし、OED で確認すると、これらは初出が 1600 年頃かそれ以降であるので、恐らくコケラムの時代には新

語に近く、いわゆる難語であったのであろう。

以上、概括すると、コケラムが初めて収録した語は一部を除くと難語であり、その中には、実際に用いられていたかどうか疑わしい幽霊語 (ghost word) も少なからず含まれていた。

３．１．２．品詞

The English Dictionarie に品詞表示はないが、定義をもとに、扱われる見出し語の品詞について検討する。ここでは、第 1 部のアルファベット項のうち、B, G, O, T 項のすべてを対象として、そこに含まれる計 616 の見出し語、すなわち、第 1 部の総収録項目 (5810) の約 1 割に相当するサンプルについて調査した。

サンプル調査対象の 616 項目のうち，以下の 4 項目では複数の品詞にまたがって定義されている。

Boone.　A request, sometime good, as a boone companion.（名詞，形容詞）

Gourmondize.　Gluttonie, to eate like a Glutton.（名詞，動詞）

Gust.　To taste, sometimes a great puffe of winde.（動詞，名詞）

Treble.　Threefold, or to make a thing thrise as bigge as it is, sometime the highest note in musicke.（形容詞，動詞，名詞）

他の 612 項目については，品詞の分布は下記のとおりである。

名詞	形容詞	動詞	副詞	計
369 (60.3%)	120 (19.6%)	117 (19.1%)	6 (1.0%)	612 (100.0%)

ブロカーの *An English Expositor* では、同じく B, G, O, T 項を対象として調査したところ、名詞・形容詞・動詞・副詞の割合は、それぞれ 75.8%、15.5%、8.1%、0.6%であった。それに比すると、コケラムでは形容詞の割合が若干増え、とりわけ動詞については割合が 2 倍以上になっている。つまり、同じく難語辞書の伝統に属するブロカーに比べて、コケラムでは形容詞と、特に動詞の増強が図られている。

コケラムの見出し語の特徴として、ある語を収録すると、その派生語も併せて収録する場合がしばしば見られる。たとえば、O 項の始まりの見出し語は、順に、OBambulate, Obambulation; Obarmate, Obarmation; Obduct, Obduction; Obdurate, Obduration; Obequitate, Obequitation であり、動詞とその派生語の組が整然と連続している。また、形容詞とその

派生語が連続して隣接する例としては、Beneficence, Beneficent; Beneuolence, Beneuolent; Benigne, Benignitie を挙げることができる。このように同じパターンで連続して出現する例ばかりではないが、コケラムはある程度機械的にラテン語由来の語を複数品詞にわたって辞書に採り入れていることが分かる。

３．２．定義

コケラムの定義は大抵、非常に簡潔である。ブロカーと共通する項目の場合、定義は同一か近似、あるいは、ブロカーの定義を簡略化していることが多い。3.1.1. で見たように、第 1 部の B, G, O, T 項のうち、それぞれ最初の 25 項目、計 100 項目について調査した結果、コケラムとブロカーの共通項は 56 であったが、そのうち、定義に関しては、同一かほぼ同一が 23 項目、近似が 8 項目、ブロカーの定義を簡略化したもの 21 項目、異なるものが 4 項目であった。

まず、同一かほぼ同一の定義の例を挙げる。

<Bullokar 1616>　*Bastinado*.　A staffe: a cudgell.
<Cockeram 1623>　*Bastinado*.　A staffe, or cudgell.

<Bullokar 1616>　*Barriers*.　A warlike exercise of men fighting together with short swords, and within some appointed compasse.
<Cockeram 1623>　*Barriers*.　A warlike exercise of men fighting with short swords, and within some appointed compasse.

次に、近似の定義の例を挙げる。

<Bullokar 1616>　*Oblation*.　A sacrifice, an offering.
<Cockeram 1623>　*Oblation*.　An offering or sacrifice.

<Bullokar 1616>　*Barrester*.　He that is allowed to pleade causes at the barre.
<Cockeram 1623>　*Barrester*.　One allowed to plead at a barre.

最初の例 (‘oblation’) は、ブロカーの類義語の順を入れ替えたものである。この種の順序変更は、コケラムがブロカーから借用する際にしばしば見られる手法である。

次に、ブロカーの定義を簡略化した例を見てみよう。

<Bullokar 1616>　*Genealogie*.　A pedegree; a declaration of ones linage, stocke, or race.

<Cockeram 1623>　*Genealogie*.　A pedegree.

<Bullokar 1616>　*Badger*.　He that buyeth corne or victuall in one place, to carry into another. It is also a beast of the bignesse of a young Hog, liuing in the woods, commonly called a Brock.

<Cockeram 1623>　*Badger*.　One that buyes corne or other victuall in one place to transport it to another, for gaine.

2 組とも後半の定義を省略することにより、簡略化を図っている。これもよく見られる手法である。

最後に、両者で異なる定義の例を挙げる。

<Bullokar 1616>　*Temporall*.　That which endureth but a time.

<Cockeram 1623>　*Temporall*.　For a time.

<Bullokar 1616>　*Gaynest*.　Most profitable or neerest.

<Cockeram 1623>　*Gaynest*.　The neerest way.

2 組とも定義の表現方法が異なっている。ブロカー以外の他の資料に拠ったのであろう。

以上、コケラムの定義法を主にブロカーとの関連で見た。コケラムは、見出し語だけではなく、定義においても、ブロカーに負うところが大であった。一方、コードリーとの間には、定義の点で、それ程の類似性は感じられない。コケラムのコードリーへの依存度は低いと言ってよいだろう。

4．*The English Dictionarie* の特徴：第 2 部

難語の意味を知ることを目的とする受信型の第 1 部に対して、第 2 部は日常的な語を高尚な語に置き換えて表現することを目的とする発信型である。コケラムが依拠した資料に関して、Starnes and Noyes (1991[1946]: 32) は次のように述べている。"His list was based upon entries found in Rider's *Bibliotheca Scholastica*, or the later revisions (1606, 1612, 1617) of this book by Francis Holyoke."　つまり、コケラムは、ジョン・ライダーの英羅辞書、あるいは、フランシス・

ホリヨークによる改訂版に依拠していたという指摘であり、例としてして 20 項目ほど引かれているが、ここでは参考のため最初の 4 項目を下に引用する。[6)]

RIDER, 1589; RIDER-HOLYOKE, 1617		COCKERAM, 1623	
To Charge, or burden	Onero	*To charge*,	Onerate
So charged	Oneratus		
Chargeable or burdenous	Onerosus	*chargeable*,	Onerous
To charme, or enchaunt	Incanto, excanto	*To Charme*,	Incantate

コケラムは、To charge, chargeable, To Charme という平易な英語の対応語として、Onero, Onerosus, Incanto というラテン語を英語化して、Onerate, Onerous, Incantate という高尚な語を当てたのであろうという指摘である。（なお、incantate は、OED ではコケラムからの引用例しかなく、*Obs[olete]. rare*[-0] というレーベルが付けられている。ラテン語を元に造語したが、実際には英語の文献において用いられたことのない幽霊語である可能性が高い。）

以上のことを踏まえて、パイロットスタディーとして、コケラムの *The English Dictionarie* (1623) の第 2 部の B, G, O, T 項のうち、それぞれ最初の 25 項目、計 100 項目を取り上げ、第 1 部との関係、および、ライダーの英羅辞典 (*Bibliotheca Scholastica*) との関係について調査した。

まず、コケラムの第 2 部の項目が、それに相当する第 1 部の項目と完全に裏返しの関係にあるものは、第 2 部の 100 項目中で 25 項目あった。また、表現上の若干の相違はあるが、ほぼ裏返しの関係にあると考えられるものが 44 項目あった。両者合わせると、第 2 部の 100 項目のうち 69 項目（約 7 割）は、日常語と難語との対応関係において可逆性があった。完全に裏返しの関係にあるものと、ほぼ裏返しの関係にあるものを、それぞれ 2 例ずつ挙げる。

Cockeram 第 2 部	Cockeram 第 1 部
a going Backward. *Retrogradation*.	*Retrogradation*. A going backwards.
to Obtaine by request. *Exorate*	*Exorate*. To obtaine by request.
to be Obtained, *Impetrable*.	*Impetrable*. Easie to bee obtained.
a Taking out of. *Abstraction*.	*Abstraction*. A taking away.

ところで、第 2 部の 100 項目の中で与えられた対応語は、総数で 128 語ある。そのうち、第

1 部に該当する見出し項目がない語は 18 語で、残りの 110 語 (約 8.5 割) は第 1 部で見出し語として扱われている。コケラムにおいては、第 1 部と第 2 部との間で連関が保たれていることが分かる。[7)]

ライダーの英羅辞書 (*Bibliotheca Scholastica*) との関係については、第 2 部の 100 項目の中で与えられた計 128 の対応語のうち、筆者が調査したところでは、ライダーに何らかの形で該当すると思われる項目があるのは 79 語 (約 6 割) であった。一方、該当する項目が見当たらなかったのは 49 語 (約 4 割) であった。前者の例を若干引いておこう。

Rider (1589)	Cockeram 第 2 部
Occupation of husbandrie Villicatio	Occupation in husbandry, *Villication*.
A taking prively Surreptio	a Taking priuily, *surreption*.
To gather goodes, or treasure Thesaurizo	to Gather vp treasure. *Thesaurize*.

しかし、ライダーに該当項目がない語が 4 割ほどあることから判断すると、ライダーへの依存度を過度に強調することは問題ではないかと思われる。

５．*The English Dictionarie* の特徴：第 3 部

第 3 部は百科的項目に特化し、その表題が示すように、Gods and Goddesses, Men and Women, Boyes and Maides, Giants and Diuels, Birds and Beasts, Monsters and Serpents, Wells and Riuers, Hearbs, Stones, Trees, Dogges, Fishes, and the like (男神と女神、男性と女性、少年と少女、巨人と悪魔、鳥と獣、怪物と蛇、泉と川、草木、石、樹木、犬、魚、等) を扱っている。第 3 部全体が 37 の範疇に分かれ、それぞれの範疇は、Beasts から始まり Woods まで、アルファベット順に配列されている。そして、各範疇ごとに見出しがアルファベット順に配列されている。見出しの総数は 781 項目である。

なお、Men, Women, Maides, Nymphs の 4 範疇には、以下に示すとおり、関係節あるいはその他の修飾語句を伴った下位分類がある。（各下位部類の後の括弧内の数字は、見出し項目数を示す。下線は筆者。）

(i)　**Men** (22 分類、計 226 項目)

Men that were <u>Captaines</u> (29)	Men that were <u>Emperours</u> (12)
Men that were <u>Kings</u> (19)	Men that were <u>Tyrants</u> (7)

Men that were deformed (3)
Men that were Flatterers (4)
Men Grauers and Caruers (4)
Men that were Inuenters (16)
Men that were Gluttons (5)
Men that were Painters (4)
Men that were Phisitians (5)
Men that were Soothsayers (4)
Men that were Wrastlers (6)
Men that were eloquent (5)
Men that were foolish (5)
Men vext in Hell (4)
Men Iudges in Hell (1)
Men that were Musitians (6)
Men that were Philosophers (27)
Men that are Poets (10)
Men that were Theeues (4)
Men of sundrie Qualities (46)

（ⅱ）**Women** (7 分類、計 59 項目)

women that were shameles (4)
women that were chaste (4)
women excelling for loue to their Husbands (15)
women of sundrie qualities (15)
women that were transformed (5)
women Queenes and queanes (7)
warlike women (9)

（ⅲ）**Maides** (3 分類、計 21 項目)

Maides that died for loue (5)
Maides that were Transformed (5)
Maides chaste and beautifull (11)

（ⅳ）**Nymphs** (3 分類、計 3 項目)

Nimphs of the Meadowes (1)
Nymphs of the woods (1)
Nymphes of the Sea (1)

男女に関して、様々な側面が取り上げられていることが分かる。上記の 4 範疇以外に、33 範疇（472 項目）がある。[8)]

ところで、ブロカーの *An English Expositor* は百科的項目を多く含み、しばしばかなりのスペースを費やして詳しい説明がなされていたが、コケラムは、第 1 部の難語項目の場合と同様、百科的項目に関してもブロカーから借用している例が見受けられる。特に、コケラムの “Of Beasts” という範疇ではその傾向が顕著である。たとえば、‘Crocodile’, ‘Lizard’, ‘Tyger’ などの項では、ブロカーの特徴的な説明とほぼ同一か近似している。

おわりに

以上，ヘンリー・コケラム の *The English Dictionarie* について検討してきた。コケラムは、先行のブロカーの *An English Expositor* からの借用が顕著で、確かに今日的な視点からすると驚きを禁じ得ないが、全体として見ると，英語辞書の第 3 号として幾つかの新機軸を打ち出しており、小規模ながら非常に野心的な辞書であったと言ってよいだろう。第 1 部では、見出し語を先行の 2 辞書よりも大幅に増やした。第 2 部では、日常的な語を主にラテン語由来の高尚な語に置き換えるという、発信目的の表現辞典的発想を英語辞書に導入した。第 3 部では、興味深い百科的項目を巻末に集め、主題別に配列して、適宜詳しく説明することを可能とした。

初期の英語辞書は、コードリーの *A Table Alphabeticall* (1604) から、ブロカーの *An English Expositor* (1616) を経て、コケラムの *The English Dictionarie* (1623) まで、わずか 20 年ほどの間に、段階的に着実に進歩してきた。今後は、17 世紀半ばのトマス・ブラント (Thomas Blount) の *Glossographia* (1656) をも視野に入れつつ、英語の難語辞書の伝統について稿を改めさらに追究したい。

注

1) コードリーとブロカーの辞書の特徴については、それぞれ、浦田 (2004) と浦田 (2011) で論じた。
2) 小論が依拠した版は 1623 年刊行の Nathaniel Butter 版であるが、同年には Edmund Weauer 版も刊行されている。後者では収録語に関する説明が異なり、"Being a Collection of the choisest [*sic*] words contained in the Table Alphabeticall and English Expositor, and of some thousands of words neuer published by any heretofore." (下線は筆者) と記されている。先行辞書のコードリーとブロカーに言及し、前 2 書に収録された語に加えて、これまでに公にされたことのない数千語を収録したと明言している。なお、Edmund Weauer はコードリーの *A Table Alphabeticall* の出版者である。出版者への配慮による付記かもしれない。Cf. Starnes and Noyes (1991[1946]: 26): "It seems likely that Weaver as printer of the *Table Alphabeticall* may have insisted on Cockeram's acknowledgement of his debt to Cawdrey. Butter, of course, would have had no such reason."
3) Cf. **Richard Boyle**, 1st Earl of Cork (1566 - 1643)《アイルランドの官僚；通称 'the Great Earl'；物理学者 Robert Boyle, Orrery 初代伯 Roger Boyle の父；イングランドからの新教徒の移民を促進 , Elizabeth 女王の好意を得た；橋をかけ, 港や町を建設し, 13 の堅固な城を築いた ; 晩年 Munster の反乱が起きるが鎮圧した》―『リーダーズ・プラス』s.v. *Boyle* より。
4) Cf. Osselton (2009: 139): "This is perhaps the first shot in a campaign that later compilers (Phillips, Kersey, etc.) were to wage against 'inkhorn' words, the excessive Latinity of their age."
5) 小論で OED (=*The Oxford English Dictionary*) に言及する際は、*OED Online* (http://www.oed.com/) を指す。アクセス時期は 2014 年 9 ～ 10 月。
6) ライダーの辞書については、Stein (1985: 333-52) を参照。
7) Cf. Riddell (1974: 133): "... it seems useful to point out, as Starnes and Noyes do not, that many of the entries in the first part of Cockeram's dictionary are simply taken from the second part and turned about, and that they supply a substantial portion of the entries in Part I."
8) 33 の範疇名と各範疇ごとの項目数は以下のとおり。Of Beasts (23), Of Birdes (21), Of Boyes (10), Of Cities (15), The Destinies (3), Deuils (8), Dogges (4), Fayries (3), Fishes (27), Flyes (4), Furies

(1), Giants (2), Gods (48), Goddesses (56), The 3. Graces (1), Short winged Hawkes (3), Long winged Hawkes (5), Hearbs (19), The Hesperides (1), Hills & Mountaines (4), Horses (8), Iles (7), Mermaides or Syrens (1), Monsters (10), The nine Muses (1), People of sundry qualities (68), Serpents (10), The 7. Starres (1), Stones (53), Townes (13), Trees (12), Wells and Riuers (28), woods (2). この中で最も多いのは神々（Goddesses (56) と Gods (48) ）である。次いで、様々な特徴の人々 (People of sundry qualities (68)) が目立つところであり、例えば、'Aborigeni' (原住民), 'Canniballs' (食人種), 'Hypopodes' (馬のような足を持つ俊足な人) など、人間の様々なタイプを示す語が挙げられている。また、Stones (53) も項目数から判断して関心の高いことがうかがえる。

参考文献

(1) 一次資料

< Cawdrey's *A Table Alphabeticall* 初版の復刻版 >

A Table Alphabeticall: London 1604 / by Robert Cawdrey. Amsterdam: Theatrum Orbis Terrarum, 1970.

<Cawdrey's *A Table Alphabeticall* 第 4 版 >

A Table Alphabeticall, or the English expositor, containing and teaching the true writing, and vnderstanding of hard vsuall English wordes, borrowed from the Hebrew, Greeke, Latine, or French, &c. ... Set forth by R.C. [i.e. Robert Cawdrey] and newly corrected, and with the adition of many vsefull wordes enriched. The fourth Edition. London: Edmund Weauer, 1617.

<Bullokar's *An English Expositor* 初版の復刻版 >

An English Expositor (1616) / John Bullokar. Hildesheim: Olms, 1971.

<Cockeram's *The English Dictionarie* 初版の復刻版 >

The English Dictionarie (1623) / Henry Cockeram. Menston: Scholar Press, 1968.

<Rider's *Bibliotheca Scholastica*>

Bibliotheca Scholastica. Oxford: Ioseph Barnes, 1589.

(2) 二次資料

Beal, Joan C. 2004. "Cockeram, Henry (*fl.* 1623-1658)" *Oxford Dictionary of National Biography.* Oxford: Oxford University Press. [http://www.oxforddnb.com/view/article/5780, accessed 11 July 2011]

Osselton, N. E. 2009. "The Early Development of the English Monolingual Dictionary (Seventeenth and Early Eighteenth Centuries)," in A. P. Cowie (ed.) *The Oxford History of English Lexicography.* Oxford: Clarendon Press, 131-54.

Riddell, James A. 1974. "The Beginning: English Dictionaries of the First Half of the Seventeenth Century." *Leeds Studies in English* 7: 117-53.

Starnes, De Witt T. and Gertrude E. Noyes. 1991[1946]. *The English Dictionary from Cawdrey to Johnson 1604-1755.* (New Edition with an Introduction and a Select Bibliography by Gabriele Stein.) Amsterdam: John Benjamins.

Stein, Gabriele. 1985. *The English Dictionary before Cawdrey.* Tübingen: Max Niemeyer.

浦田和幸 2004「最初の英英辞書：Robert Cawdrey's *A Table Alphabeticall* (1604)—400 年記念に寄せて」『東京外国語大学論集』69: 27-40.

_____ 2011「初期の英英辞書：John Bullokar's *An English Expositor* (1616) について」『東京外国語大学論集』83: 289-307.

On Henry Cockeram's *The English Dictionarie* (1623): The Third English Monolingual Dictionary

URATA Kazuyuki

Henry Cockeram's *The English Dictionarie: or, An Interpreter of Hard English Words*, published in London in 1623, was the third English monolingual dictionary, coming after Robert Cawdrey's *A Table Alphabeticall* (1604) and John Bullokar's *An English Expositor* (1616). As described succinctly in the *Oxford Dictionary of National Biography* (s.v. Cockeram, Henry (*fl.* 1623-1658)), "*The English Dictionarie* is a small octavo volume, divided into three 'Bookes': the first contains 'the choicest words themselves now in use'; the second a list of 'vulgar' words with their more 'refined' synonyms; and the third an encyclopaedic section containing information about '[several persons,] Gods and Goddesses, Giants and Devils, Monsters and Serpents, Birds and Beasts, Rivers, Fishes, Herbs, Stones, Trees, and the like'."

Although modest in size, Cockeram's *English Dictionarie* was an ambitious and innovative lexicographical product in that:

(1) the first part contained far more hard-word entries than the works of his predecessors: 2.3 times as many as Cawdrey (1604) and 1.4 times as many as Bullokar (1623);

(2) the second part could be used as an 'encoding' dictionary for writers looking for more elegant or pompous words, which was a novel feature in English dictionaries of the day;

(3) the third part, dedicated to encyclopaedic information, made it possible to provide a detailed and relevant account of names in a thematic arrangement, which was a common practice in contemporary Latin dictionaries but a new one in English dictionaries.

Early English dictionaries in the hard-word tradition had achieved gradual, steady progress in scope within a period of no longer than twenty years, from Cawdrey (1604) through Bullokar (1616) to Cockeram (1623). This tradition would lead to Thomas Blount's much more substantial and sophisticated *Glossographia* (1656) after an interval of another thirty years.